

日本災害看護学会 令和6年能登半島地震・能登豪雨災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日：2024年11月22日（金）

活動員：福島芳子 寺田英子

1. 活動期間

2024年11月19日（火）8：00～2024年11月21日（木）17：00

2. 活動場所

避難所：珠洲市立大谷小中学校（石川県珠洲市大谷町1字78番地）

仮設住宅：正院地区、宝立地区、大谷地区（高屋地区応急仮設住宅）

在宅：大谷地区

3. 珠洲市の被害状況

1) 令和6年能登半島地震（11月19日14：00現在 石川県庁情報第169報）

人的被害 死者：126人 うち災害関連死：29人 負傷者：重傷47人、軽傷202人

住家被害 建物全壊・半壊・一部破損：5,563棟、非住家被害：6,061棟

避難所開設数：10箇所 避難者数：57人

2) 令和6年奥能登豪雨（11月19日14：00現在 石川県庁情報第31報）

人的被害 死者：3人 負傷者：軽傷9人 住家被害 建物全壊：9棟 床上浸水13棟

床下浸水164棟

避難所開設数：2箇所 避難者数：22人

4. 大谷地区避難者状況

大谷小中学校避難所利用数（11月19日～11月21日）：26人（うち70歳以上11人）

5. 支援活動の実際

#)大谷 小中学校避難所#)

避難所の運営面では、避難所管理者を中心として毎朝の8時半のミーティングが実施されていた。ミーティングでは、避難所内の状況や前日の出来事の報告、当日の行事予定、課題などが共有されていた。避難所管理者や食事担当、物資担当、消防による住民主体の運営体制を石川県からの行政支援者2名が支援している。玄関回りの掃き掃除、トイレ清掃、食事の準備や弁当の仕分け作業などは、住民が役割分担して円滑に実施されていた。われわれもミーティングに参加し、健康面や生活環境面について必要時支援している。

健康面の支援として、主に住民の方の健康状態の聞き取りや生活状況の観察、服薬や血圧測定の自己管理の状況を確認し、住民の自律的な健康管理と健康維持の様子を見守った。また、2週間に1回開設される大谷診療所に受診の必要な住民をピックアップし、受

診支援を実施した。空気が乾燥しているせいか、咳の出る住民も散見されていたが、感染症による有症者も発生したため運営管理者に相談の上、隔離策を講じ、消防と連携して定期的な観察や配膳下膳、携帯電話による連絡ルートを確保し、症状悪化や生活上のニーズに対応できるようにした。

生活環境面の支援として、仮設トイレの床のブルーシートの張替えが住民では実施困難だということで依頼を受け、行政支援者と協力して実施した。われわれが不在の週末にブルーシートの下に汚水が入り込むような床の汚染があったが、火曜日に来訪するわれわれを待って張替えを行ったという状況であった。今後は住民が自分達で対応できるよう運用を考えていく必要がある。また、2週間前に行政支援者にトイレ周辺の消毒は次亜塩素酸ナトリウムで実施するよう依頼していたが、継続して実施されていた。

災害支援の一環としてクリーニングのサービスが始まっており、避難所内にある使用済みの布団や毛布などが順次クリーニングされ厳冬期に備えられていた。現在使用している寝具も長期間使用している住民も多いため、今後は順次クリーニングしたものと入れ替えを行っていく予定であるとのことであった。

#)高屋地区応急仮設住宅の訪問#*

高屋地区応急仮設住宅に在住の女性の独居高齢者宅を訪問した。ささえ愛センターの生活相談員も定期的に訪問しており、健康状態や生活状況には特段の変化や困りごとはないとのことであった。週1回の外部支援の医師による診察も受けており、継続が必要な降圧剤なども処方されているとのこと、われわれを話し相手として活気ある表情で話をされていた(写真1)。

#)珠洲市自然休養村センター#*

常駐する避難所支援者の方に状況を確認した。センター内の避難者は8名、在宅避難者は45名であった。センター内の避難者の健康問題は特になく感染症の発生もないとのことであった(写真2)。

#)エリア会議・情報共有会議#*

ささえ愛センターにて11月20日(水)9:00~11:30 エリア会議が開催された。ささえ愛センターの地区ごとの支援担当者が中心となって、健康増進センター、珠洲市の健康福祉課、地域包括支援センター、MSW およびわれわれ学会メンバーで、要フォロー者への支援状況や現時点での課題の共有、ケース毎の支援の方法などが検討された。課題の一つとして、避難所で増えてしまった荷物の片づけや、仮設住宅に転居する際の荷物運びに困っているというもの、仮設住宅に転居後も様々な理由で荷物が片づけられない、捨てられない、狭い仮設住宅に入りきれないくらいの荷物が生活上で出たゴミとともにあふれているなどの課題が挙げられ対応策が検討された。

また同日 13：30～14：30 情報共有会議が開催された。上記各支援団体や病院などが各地区の状況を共有し、課題の検討がなされた。個別のケースについて、住民の心理状況や家族状況に寄り添いながら、法的な支援制度などの活用や必要な介護・福祉サービスにつなぐ調整などが行われた。

#)地域コミュニティ支援#*

1) 大谷地区お茶会

日時：11月19日(火)13：00～15：00

場所：大谷小中学校ランチルーム

参加者数：16人

内容等：ピースボートと協力して、健康講和「クイズで学ぶ脳卒中」、きなこ餅作り、を実施した。また個人ボランティアによるアクセサリー作りが実施された。健康講和は、この時期から冬にかけて急増する出血性脳血管障害を中心に、脳卒中の危険因子や生活習慣に関する知識、ヒートショックの予防についてなどをクイズ形式で学びを深めた。特に脳卒中の症状が出現したら、すぐに救急要請をすることには多くの方が強い関心を示すなど熱心に参加されていた(写真3、4)。

2) 宝立地区お茶会「集いの会」

日時：11月20日(水)13：00～15：00

場所：宝立第1仮設集会所

参加者数：11人

内容等：健康講和「クイズで学ぶ脳卒中」、セルフハンドマッサージを実施した。健康講和は、ご自身の生活環境や体調のことに関連させて考えていただく様子があり、関心が高かった。セルフハンドマッサージでは、リラクゼーション効果のある音楽が流れる中クリームを選び、自身で手指をマッサージしながらゆったりとした時間を過ごされていた。「寝る前にやってみます」「手がポカポカする」などの感想があり喜ばれている様子であった。

6. 支援活動を通しての所感と課題

珠洲市の各避難所は12月には閉鎖の方向で調整が進んでいる。避難所の住民は仮設住宅への転居や家族宅への転居などの時期が迫ってきている。それぞれの生活環境の変化と厳冬期対策という課題が目の前にある。従来、寒さや冬季の孤立には慣れていると地域ではあるが、上下水道や道路などのインフラが整わない中での生活の維持は十分な対策が必要である。

エリア会議でも課題として挙がっていたが、長期化する避難生活の中で、支援物資や家から持ち出した生活用品などが増えている住民も多い。実際に避難所の中でも、仮設住宅への転居を前に、ベッド上に荷物をたくさん広げ片づけに終始している高齢の住民も見か

けたが、しばらく片づけをしてすぐに疲れた様子で座り込んでしまっていた（写真5）。転居の支援として一般ボランティアの活用など対策をとり、転居に伴う心身のストレスの軽減に努める必要がある。

今回は、2か所の地区でお茶会を開催したが、いずれも参加者は固定化されつつある。また、男性参加者がほとんどいないという傾向である。同居者を誘って参加していただくように伝えたが、「昼食後すぐに横になって昼寝しているから」「出不精だから」という返答があった。今後寒くなってくると、ますます家に閉じこもりがちになることが予測される。家にいる時間が長くなると、隣や上階の物音が気になり騒音トラブルに発展する可能性や運動不足、アルコールの過剰摂取、さらには孤立などの問題が考えられる。

一方で、若い男性を中心として男性のためのイベントの企画も進行中であるとのことであった。もとより住民同士のつながりが強い地域である。それを強みにして共助を機能させ生活環境の変化や厳冬期を乗り切っていけるよう、見守る必要がある。

以上

【参考写真】



写真1 仮設住宅訪問の様子



写真2 馬縹地区避難所



写真3 お茶会の様子



写真4 お茶会の様子



写真5 生活エリアの片づけをする住民

写真の撮影および掲載はご本人の許可を得ています